Ⅳ　研究開発の実際と成果

１．本年度の研究の重点

(1)　学習分野部会と，授業研究会　－授業研究会後にウエイトをおくスタイル－

２年次は，授業改善のポイント「違いを発見すること」「違いを排除しないこと」という１年次の視点を引き継ぎながら，育みたい「公共性リテラシー」を子どもの学びから探り明らかにすることをめざし，学習分野に焦点を絞って研究を行った。

ひと月に１回，すべての学習分野で授業研究会を行った。

授業者は事前に，学習指導案（Ａ４・１枚）に授業のねらいや「公共性」に関する考えを簡潔にまとめ，参観者は授業中に，①子どの学びについて，②教師の関わり，③「公共性リテラシー」に関すること，④その他気づいたことを付箋紙にメモする。授業後，小グループで模造紙に付箋紙を貼りながら語り合い，グループごとの話題を全体に報告する。最後に，授業者からの話を聞いた後，全員「私が今日学んだこと（ふり返り）」を短く書いて研究推進部に提出する。研究推進部ではふり返りをまとめ，「ふり返りのふり返り」として全体に配布する。

「ふり返りのふり返り」を読むことによって同僚のものの見方，自分になかった視点を発見したり，「公共性」に限らず，教育に対する考え（思想）を共感的批判的に深めたりすることができた。深めるというのは何かが明確になるだけでなく，悩みが増えるときも多い。新たな課題のタネが見つかるというのが，同僚と協働する学びの場としての授業研究会の適切な姿だと考えられる。

授業研究会と並行して，ひと月に１回，学習分野部会の時間をとった。部会の中で，意見の交流（対話）を行い，授業研究会と学習分野部会を教師の学びのプロセスに位置づける工夫をした。

(2)　実践記録と省察　－実践記録を書き，それを読み合い，グループ省察をするというスタイル－

これは今年度，新たに始めた取り組みであった。授業研究会が終わってから授業者が「実践記録」を書き起こし（あ），それをグループで読む会をもち（い），出てきた話題を研究推進部がまとめて「省察」を書く（う）という一連の方法にチャレンジした。（あ）には授業者に事後の時間的な負担をかけるが，教材研究や導計画は妥当だったのか，子どもの学びはどうだったのかなど，改めて自分の考えを記述し，書くことによって考える機会となった。実践記録を書く作業は，教師の自己内対話を豊かにする。（い）では，小グループで（あ）を読みながらフランクに話し合う。授業者の記述から，その授業のときの子どもの姿を思い返したり，「ここで言いたいことは何？よく伝わらない」と指摘したりした。学習のプロセスから何を抽出して文章化したらよいか，実践記録の価値そのものをお互いに考え込む場面もあった。（う）の段階で，グループで話し合ったことは「省察」と名付けて，研究推進部メンバーが責任をもって実践記録に書き加えた。本校の場合，一人一人が行うものを「ふり返り」，複数で行うものを「省察」と，分けて考えている。以上のように，実践記録とグループ省察は，数ヶ月かける長いスパンで，教師自身によって行う教育研究・研修であり，個人として組織として教師の学習を推進するひとつの方策であった。

(3)　学習における「公共性」育成プランの作成

本校各学習分野の目標について，現行学習指導要領（教科）との比較検討を加えつつ，上述した学習分野部会，授業研究会，実践記録と省察，を通して見えてきた「公共性リテラシー」を洗い出して一覧にし，「学習における『公共性』育成プラン」を作成した。実際の学習活動例も，他校での実践に役立つよう，できるだけ記載している。

学習分野担任制への移行時期であること，抽象的に考えたり客観的に見る目が芽生え伸びたりする時期であること，という２つの理由から，中学年は異質との出会いが豊富であるときと捉え，２年次の「公共性」育成プラン検討の中心的な発達に置いた。

このプランは，来年度（３年次）の完成を目指して取り組んでいる。以下には，各学習分野の，現段階での，学習における『公共性』育成プランを掲載する。